

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・1F 廃炉の先研究会+ふたば未来学園中学校・高等学校

第1回・1F地域塾
議事録

開催日時：2022年7月16日（土）13:30-17:35

会場：ふたば未来学園+Zoomミーティング

参加者数：78名

総合司会：小磯匡大（副塾頭）・鈴木知洋（副塾頭）

プログラム

13:30-13:55 1F 地域塾の背景と目的：松岡俊二（塾頭）

13:55-15:35 6グループの自己紹介：1F 地域塾で「知りたい」・「語りたい」・「学びたい」
(10分休憩)

15:45-16:45 総合討論（各グループ 5 分報告）：崎田裕子（副塾頭）・森口祐一（副塾頭）

16:45-17:00 塾とは何か：南郷市兵（ふたば未来学園）

17:00-17:15 学ぶとは何か：菅波香織（1F廃炉の先研究会、未来会議・事務局長）

17:15-17:35 1F 廃炉の先を考える「対話の場」=「学びの場」づくり：松岡俊二（塾頭）

1. 1F 地域塾の背景と目的

松岡俊二（塾頭）

（報告内容は報告資料を参照ください）

2. グループディスカッション

グループ A(GM: 朱鉄、塾生 8 名、オブザーバー 3 名)

- ・1F 廃炉作業の具体的な進捗、課題、および今後の計画など、廃炉に関する技術的問題を 1F 地域塾で学びたい。また、トリチウム水の海洋放出の安全性に関しても議論していきたい。
- ・地域内外の人の福島や原発事故に対する認識が違っている。福島の塾生は被災経験に印象深いのに対し、県外の塾生は廃炉のコストや、これからどう廃炉に向き合うかに关心を持っている。また、地域の魅力づくり、あるいは外への魅力の発信が今後の課題になる。
- ・将来に向けて、塾生から「どの段階をもって廃炉なのか」、「廃炉の終了とは何か」という質問が提起された。さらに、その「廃炉の終了」は技術専門家が決めた作業の終了がある一方、人々の心の中での終了もあるのではという意見もあった。まだ明確にされていない廃炉の先の姿を議論していきたい。
- ・廃炉の先に関連し、何をもって復興と言えるかという質問もあった。よそ者に決められるのではなく、地域の人々自身が安心して暮らせるような「心の復興」によって、地域の復興を定義すべきであるという意見があった。
- ・現在世代の記憶、教訓を将来世代に引き継ぐことが重要である。そのために、将来に向けた地域の新しいシンボルや、廃炉遺産の活用を考える必要がある。

＜塾生代表のコメント＞

- ・廃炉のゴールのみならず、復興のゴールとは何かということも考えるべき問題である。それは地域では

概念化されていないが、復興とは自分自身の復興、アイデンティティの復興であると考えている。原発事故や避難によりつけられた傷の回復はこれから一生の目標であり、自分自身の復興は復興のゴールであると思う。

- ・どのように自分自身の復興に向かうというと、自分はふるさとの富岡町を知ることから始めている。事故前・事故時・現在の富岡町を知ることで、将来の復興に向けて努めたい。

グループB(GM:田代滉介、塾生7名、オブザーバー2名)

- ・1F廃炉のすべてを知りたい。廃炉の現状はただテレビのニュースで知っている程度であり、これまでの成果や作業の進捗などの廃炉の技術面についてより詳しく知りたい。また、放射線汚染など、廃炉による地域への影響も知りたい。
- ・東電はこれまで地域社会に溶け込んでおらず、地域との交流不足を感じた。これから廃炉が進んでいく中で、東電と地域社会の関係構築が問われる。
- ・塾生は廃炉の先の将来に关心を持っている。脱原子力や石炭火力発電の導入などが今進んでおり、将来のエネルギー構造はどうなるかが気になる。また、廃炉の何十年にもわたる時間的スケールを考えれば、廃炉は将来世代のためのものであり、若者の意見を十分に考慮するべきである。
- ・福島の豊かな自然と伝統文化を誇りに思っていて、福島の魅力を広く発信したい。

＜塾生代表のコメント＞

- ・グループでは、原発がなければどうなるだろうという質問があった。原発がなければ、この地域がたぶんまったく別の様子になるだろう。しかし逆に、原発があるからこそ、繋いだ縁もある。原発による苦しい経験があるが、原発の存在で繋いだ縁も大切にしたい。

グループC(GM:松川希映、塾生9名、オブザーバー1名)

- ・1F廃炉について、その現状と将来像をより詳しく知りたい。廃炉にどういう作業を含んでいるか、また、「廃炉の終着点」とは何かなどの質問があった。
- ・これまで原発と地域との関わりという歴史的文脈を踏まえながら、将来廃炉と地域の関係、地域の将来像を考えていきたい。
- ・塾生からトリチウム水の海洋放出に大きな関心が寄せられていた。市民が単純に海洋放出に反対するわけではなく、海洋放出の安全性は科学者の中でも意見が分かれています、一般市民は何を信じればいいか分からなくなる。そのため、海洋放出の安全性、およびトリチウム水の行方を地域塾で議論したい。
- ・原発事故後の福島の風評被害が問題になっている。県外の人は福島に対してマイナスイメージを持っているようであるが、廃炉に対してどういう認識なのかを知りたい。また、福島のマイナスイメージの払拭のために、どのように福島の現状や魅力を外に情報発信するのかを考える必要がある。
- ・将来の原子力政策を含めたエネルギー政策の方向性をどう考えればいいかを知りたい。

＜塾生代表のコメント＞

- ・私たち若い世代は廃炉について知らなければならないことがたくさんあり、いろいろな知識を学びたい。
- ・原発事故を経験していない世代が増えていて、彼らたちにとって原発事故を「歴史の一部」を捉えている。そういう記憶の風化を危惧し、福島だけでなく、当時お世話になった避難先の人々にも事故の記憶を伝えたい。
- ・本日は多様な職業、多様な立場の人々と交流ができて良かった。将来もこのようにいろいろな人と福島のことを話したい。

グループD(GM:倉重水優、塾生8名、オブザーバー1名)

- ・燃料デブリ取り出しの実行可能性、作業員の安全確保など 1F 廃炉に関する技術的な質問があった。なお、塾生はトリチウム水の海洋放出による漁業への影響にも関心を持っている。
- ・1F 廃炉の終着点（廃炉の先）が塾生の関心事項である。廃炉の先のあり方は今明確にされていないが、それが地域社会にも納得できる形になるために、地域社会がどのように廃炉の先の決定プロセスに関わ

ればいいかを議論したい。また、そもそも、なぜ廃炉の先の見通しが未だに立っていないのかも知りたい。

- ・1F 遺構を保存するか、最終的に撤去して更地にするかについて、今後それぞれのメリットとデメリットを比較しながら検討していきたい。
- ・世代間の視点の違いがあった。年配の人は当初原発建設時の記憶を持っているが、若い世代は地域内外にもかかわらず、原子力事故の記憶すら薄い。今後、年代や居住地域による違う視点から、原子力災害を振り返った上、共に廃炉の先のあり方や、廃炉の先と地域復興の関係を議論したい。

＜塾生代表のコメント＞

- ・地域内外のさまざまな人が関わることによって、1F 廃炉の将来像の考え方も変わるだろう。地域内外の人が廃炉のプロセスに関わっていくことで多様な意見が生まれ、問題解決に繋がると考える。
- ・本日は多くの新鮮な意見を聞いて貴重な機会になった。その中で、1F 遺構を残すかどうかという議論に印象深かった。震災遺構の保存について、例えば請戸小学校の遺構の保存に対して当時地元では賛成しない声もあったと聞いているが、遺構の保存で記憶風化の防止や、地域外に広く伝えることができると考える。
- ・1F 遺構の保存も、1F 廃炉で大事な問題になる。地域内外の見方は異なるため、地域内外の人々が意見を交わし、それぞれの意見を統合することで、理想的な将来像を見出すことができるのではないか。

グループ E(GM:高垣慶太、塾生 9 名、オブザーバー 3 名)

- ・1F 廃炉の作業について、現在の進捗、放射性廃棄物の処分先の選定、取り出された燃料デブリの処分方法、廃炉作業中の安全性などをより多く知りたい。そして、廃炉の時間と規模も知りたい。
- ・大部分の塾生は1F 遺構を保存したいという意見を述べた。原発事故を知らない世代が増えていく中で、1F 遺構を見る形で保存することで、将来世代に記憶、教訓を伝えることが大事である。ただし、具体的にどういうメッセージを伝えるか、どのように伝えるかは、地域塾で学びたい。1F 遺構を保存するかどうかは、地域の歴史文脈において捉える必要がある。そのため、地域の人々も決定プロセスに参加し、社会的合意の形成が求められる。
- ・廃炉終了後の地域の将来について、帰還人口が依然として少なく、コミュニティの回復、人々の連帯感が課題になる。また、将来原子力に対する扱い方などのエネルギー事情も議論したい。

＜塾生代表のコメント＞

- ・廃炉と地域の結びつきが強いことを改めて実感した。廃炉は地域社会と東京電力が寄り添わないと解決しない問題だと考える。
- ・しかし、地域の人は専門知識を持っていない。グループ討論では、廃炉に関する正確情報の不足を感じるという意見が多かった。
- ・1F 遺構の保存について、やはり目に見える形がないと、原発事故を知る機会が減ってしまうという意見が出て、グループ内では、遺構として残すことには肯定的な意見が多くあった。
- ・自身は廃炉の終わりが見えないと感じ、将来世代についての話題が遠いものだと考えていた。しかし、本日の話を聞いて、同じことを繰り返さないために、将来の人に知ってもらうことが必要であると考えた。

グループ F(GM:馬屋原瑠美、塾生 6 名、オブザーバー 2 名)

- ・1F 廃炉についての情報がありすぎて、何が正解かわからなくなる。結局、地域社会の廃炉に対する理解が欠如している。今、1F 廃炉が 30~40 年間で完了すると計画されているが、本当に完了できるかが疑問である。特に地域出身の塾生は自分と行政や専門家との認識の差を感じていて、どのように地域に情報を伝えるかが課題である。
- ・塾生は廃炉による地域へのインパクトに关心を持っている。廃炉は周辺環境にどう影響がどうなるか（トリチウム水の海洋放出など）。また、地元企業も廃炉に参加したりして地域経済の促進が可能なのか。廃炉の長期的な時間スケールを考えると、地域にもたらす影響を知りたい。

- ・1F 遺構を保存する可能性が提起された。ただし、遺構の保存も含め、一般市民は廃炉に関する意思決定において、どこまで関与できるかを知りたい。

<塾生代表のコメント>

- ・どの年代でも廃炉に関する情報を入手していないと感じた。廃炉の進捗や今後の方針などが発信できていない、地域の人々も拾うことができていない、理解できていない状況にあると感じた。
- ・地域で働く人を増やし、人々の口コミによって、地域への理解が広まっていくのではないかと考える。
- ・福島は今まで「水」(海・川など)を活用して発展してきた地域である。海洋放出によって、漁業などが今までの福島とは異なる文化になってしまうのではないか、損なわれてしまうのではないかという懸念がある。
- ・3.11を経験したこと、今までの福島から変化することは必然である。昔と今の福島をいかにうまく融合していくのか、今後グループ内で議論できたらと考える。

3. 総合討論

井上(1F 廃炉の先研究会)：グループ討論では、1F 廃炉の将来像を知りたい意見が多かった。将来像を考えるために、廃炉の現状が伝わっていないのが課題になっている。また、地域も参加して、廃炉の将来像を議論することが必要であるが、それはが十分になされていない。

トリチウム水の問題も議論された。情報はたくさんあるが、どれが正しいか、何を信じるかがわからないという意見があり、印象に残った。正確な情報を着実に社会に届くような発信し方を考える必要がある。

福田(経産省)：本日の議論を聞いて、社会への情報提供の方法をもっと工夫する必要があると感じた。ぜひみなさんとディスカッションをし、地域の方々にとって望ましい情報提供のあり方を含め、国として地域のために何をしなければならないかを議論したい。

崎田(副塾頭)：もし身近のできることから意見交換ができたら、アイディアがたくさん出てくるのではと考える。

福地(朝日新聞)：廃炉と地域復興は切り離せないものであるが、新聞では別々で報道されることが多く、両者がうまくつなげられていない。この4回の地域塾を経て、参加者のみなさんの気付きや考え方の変化を記事にして、このような多様な立場の人がともに社会的課題を解決していく取り組みを幅広い人々に伝えたい。

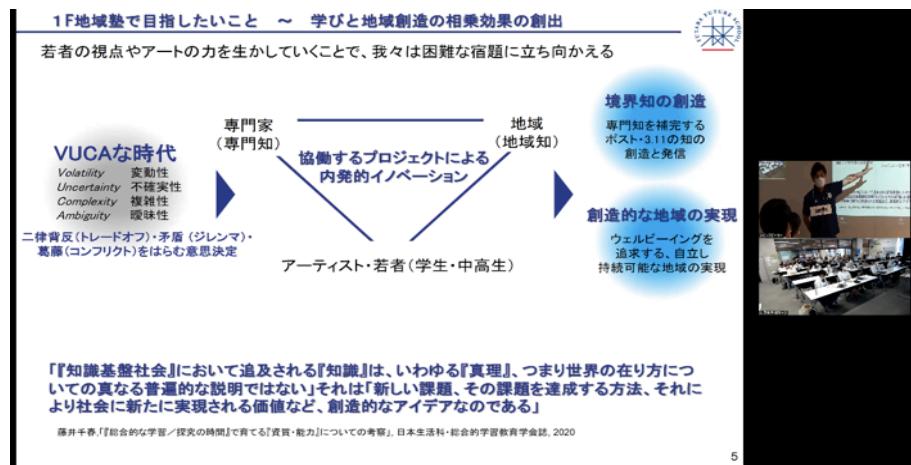
杉本(塾生)：原発事故は国全体に関わる重大な問題なのに、私たちはこれまで「お客様」の気分で国や東電に任せてしまってきた。原発事故や廃炉に対し、全社会の一人ひとりがオーナーシップを持って考える必要がある。

行木(塾生)：対面で多様な人の意見を聞くのは文字で読むのとやはり重みが違う。大変勉強になった。

4. 塾とは何か

南郷市兵(ふたば未来学園副校長)

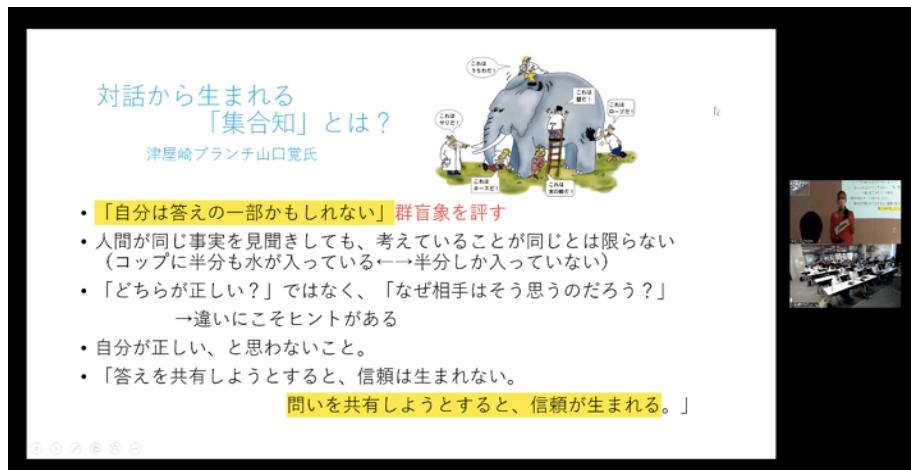
(報告内容は報告資料をご参照ください。)



5. 学ぶとは何か

菅波香織(未来会議事務局長、1F 廃炉の先研究会)

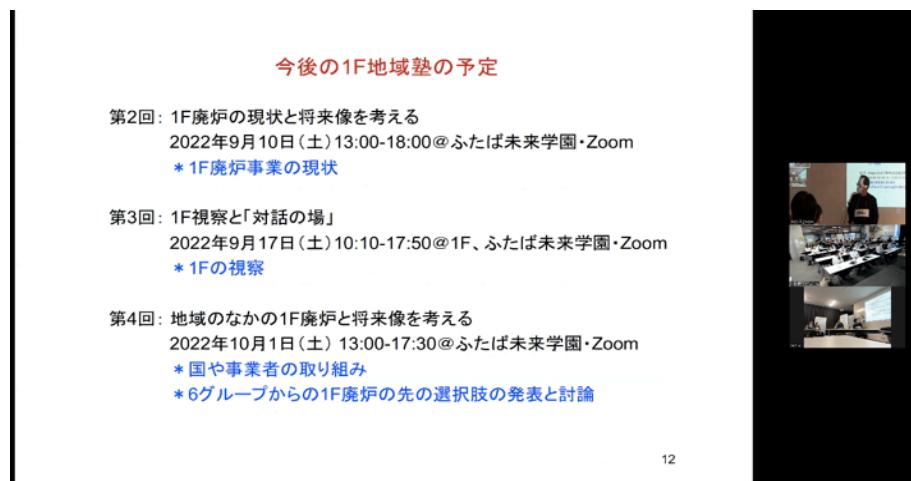
(報告内容は報告資料をご参照ください。)



6. 1F 廃炉の先を考える『対話の場』=『学びの場』づくり

松岡俊二(塾頭)

(報告内容は報告資料をご参照ください。)



【会場の様子】



以上